857
118

帝國圖書館藏

源氏二十巻抄

十九

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

857-118

源氏物語抄巻第十九

目録

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』　請求記号 857-118

ガラス使用

帝国図書之印

東屋

女阿（アツ）　寒（カン）ゐ山（テ）に詞（コトバ）多（オホ）く

蓬生（よもぎう）の秋八月（はちぐわつ）になりぬ九月（くぐわつ）も五日（いつか）の事（こと）あり

ほのぐ山をながめ　宇治（うぢ）をひろき水（みづ）うみの蔭（カゲ）（サンジ）のまくずもうれをしく

も山とりへだて　思ひへだてたる人（ひと）さへ（さえ）ぐ〳〵さるゝと傳（つた）ふる事（こと）乃

むすめ（ムスメ）ども（ドモ）をも更級（サラシナ）なれや（ヤ）なと云（いふ）ふるの

ひなびたる人（ひと）をも聞（きゝ）きをいのくと怪（アヤシ）（ハカリ）しき迄（まで）

山上（ヤマノウヘ）の尼（アマ）　姉（アネ）君（キミ）なくなりぬるとをりのやうやも見（みん）とそ

なりひさしき人（ひと）をもてなすとさまでかほとゝもとゝむる元（もと）結（ゆひ）の事（こと）と母（はゝ）

乃むす

世よありけるなり　浮舟八郎又かくろ
うこのよしもそ　常陸守そ聞て　玉鬘之親王何不忘吏
勢仍而如此乃令勘吏勢
ありあ国国守又凡人何する時止大宇治なる何事ぞ
あれ何今まれや　上総国国司之守のまと悪ゆく
ゆくと云り　常陸守若殿乃ま御人或ハ悪源少納言事
撰なき妻　以上　蔵人右近将監童少将事　以上中
将殿や　若殿う娘三人
ずゝぐく　次こや
こと人と　浮舟をそ　守なりひへたてゝ
なすこと　如何　母そ一うこ
守如何子芸する有なるを
我娘そ　守ゝれてのはくや
うんたらめ　母うこなと守も可然人とを
こともの　好事めの
葬なとかとくく　おともとなり
人れまを舌たみそこう抱もりひ
ひゝ。西　豪気　うそ我はく思む
まゝぐそきする人　金　をき海なき
ものう人　むをめよ　紙重くも
抱りこと　右抱りこまをなを
うゝぐんそ　仕や

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

庚申経ゑ　人腹中ニ三尸ゐ人大宮者庚申之夜上ニ天
帝ニ記人ゐ過失ヲ告ルヘシ生ヲ奪庚申ノ夜不寝ハ
給ハ浮天上ニ行渾詩　年長毎労推甲子　夜寒初ヶ守庚申
らうく　ものがたり　けさう人達のせとて可然とてや
山路ハ申五九云ふ事や
いひなして　猶老と含てかくちらしきと云ふすじや
たをのめの　大ねなりし人乃子　大ねな祖不通
ええ〳〵ぬるや　白通
さう人と　猶老れともほゐのうへの人そ伊ひよう〳〵やなう
あのほうこととも結て　めの〳〵とおてうえ者ゐふ也事
なきさせや　さるくや　そつゝゑてハをつゐてのむれ

人のてうし　買をや
国をもつゐふ　小神なと多申なまて　洞庭ふとの中
ふり国をせ〳〵ふる浜よや又うくゐみ〳〵らひそみく
ゑ狩ゑ
内ゐ場　今大宮井乃かくうにある　女楽ふとの時乃
あふ和　和漢国ゐや楽人謀嫁なとゐ和ふく
もやうのの　もやく般曲をや
ゐのこをゑ　嫗ゑと云娘を浮舟の母の思ひなとをとゑて
服をもり
ちううひよをそ　浮舟のもとゐ
ほうぬやうみとなり

なりひらうる　宇舟乃又宇るれけと
るくの　ゆねさえ入れ波子と思ひて文の志と
なりひ定さるとるを
ひのさへて　ひとちの宇を具したるとみや二契るとや
きうてて　中志ゆねへりてや
ゆもものもるたうり　ひ中志ゆをうとれうる舟乃宇れ
方うあるーとなり
うのゆん　急や
志ひてあてやうれらゆ　あてと云ハおとみよる弥九廿
ゆ玉奥（ケウ）てなり
いきかよさん　ひゐの为ってきいうくなれやをとるると
なまーて　内くまん思ともよ所の物そを宇舟路
たのくやもうとのゆ（久々）とわもそ
ふなうてなれゆをと堂（幺）や
源ゆ納言さゆきのうと　皆ひうる
ゑらく数弥まく出人するま
あの人　中志や
なのにうるを　あまうあるひうちの娘の中なるとや
いちやをーめうり　御ふーの（二カ）
うんのゆーや　うんを数て（宮ニイ）宇詞
なふうそ自　宇のゆるされあるーも我もさりとや
うのひーのゆさ　宇舟れうるると

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

内乃渕やと　内後へとも
てよさてくごと　要心元
ゆゝふことと人と　別又乃はゝ
りとりむりれまくふ　独女乃子まくを一と申法
船と云と給て（イツハリ）中立のめ人まうそ
後そこと　きされとなり
志のまん　う死船れのうへとう
そ守の思ひ人めとうまうそ
めれまらそ　女子をいつり
れ汚ふ人く　不望する人あたあ
こ大納そ殿　必ゐ又へ日のとも宮礼し

さやうにく　かめさゝ詞
心法まて　心なまを
あのかとの心さゝの　お遠してやいつくもとゐ人里
そ人人ハうとも称なとれまし人又母なとも
うれゝく思　中立心　何りと（ハヘカリ）婚ふへ文みも牝とも
かゝうちそこゝう　を色せひさちのゆうとをいふそて
そ如何　（ミニクテ）美汚子をと思ふ色なとゐ人里
守まん条ゝとせをしてやいつくものむといゐり
人のう　申立のゐおとうもむるり
あてひても　実なりと云心也

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

又ころも　いとの添うたやうなる方となり
なき人　年人ばかりこうち勝うるる
ごたび　いと度の筵人以
くちのつゝて　勅定とや　婿の他事よ云なり
独こちても同心な
ありそ　ゆねてさーそのの物言
わ重しあ重在　回
たとひあへすて　命とへうやもあり　あ色をを労
のなうへしのことなく成苦とるを
たう町乃みのて　う　物
うそわの娘たあもの自他奪れひさ
りようんん通のうらんも不云不及弁とや
いもそや　本五の婿ゆよ
仍不限大臣納言　乳母や
ぐくう　うくたくと云むや　纏労
公法記　摧大納言玄上　献纏労申官ト云く
中乃このて　宇母を兄分の中いちかあのをなとや
月比を又なく　婿の討ゆう
日をまの色で　宇母へと云日とや　ゆきて又なの
事ーと云筆方や
又ちらて　宇母れ名の事　爽を八文の法みと云らん人

もうでまへ給てさうし一ゐんと母さ宮くわり給

女ハまして守てもり中ちのうしたてまつりて

況(イハン)女をはてとなり

こゝろもあえ給ふまじきにやうやうおもひ

なぐさむ　御相　りのみや八ぐうじ(私)　浮舟(仮)いとん

うき給ふすさ(ママ)ひ　ゆかしく

てもなほへだてある御ありさまにて面白(ママ)

うとかりしおなじへだてを

ものうらみ

給ふ浮舟おもはゆるにやとそうしろめたく

うちとけてのみうち解給ふ事もなく

うへ　ゆかしきにもあらねどもめのとの

ありたうらんにもはぢ

せよせ給ふ(ママ)ことわりをきゝてさんと光ゆれうとめく人を

いやーうも　あさりていやーくもあるの我

女(ムスメ)をと思給ふりたる宇治(ヲヂ)殿(ドノ)へ

そんまの中ごろとやそ(二カ所)心ねとやーとも

うりもつりゆるしたる(二ヒ)仏合たる事せられ我

おぼーこと　同め

このゆうを　うとき(ママ)ふのゆめり

あひくしてう　あひてく仏合たる事せられ我

そいまーやせ

ほさいもいまく　ゆおもの

らんとなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ひくひろおしくいまし　ゐ猪ゐるまくそそてるすなく

そはこそみーうーとも

たれおや殿　夕也　あせちそ　お掃

ゑつつ　ひまろふふうせ給へ里煮れおち煮こと賀うーと

おりひーー人や

てそむひいてこのうへ天　かこ方ととへあつ雨里行てそい

うことなり

こ文　八文

さ海あーき　常陸守

まりかをなーてそ　ゐおとの物なーてそ文ひのをひろ

らんくーをおうても曲（きょく）あまーをとも

なくらーうそそこーれまるのことを　白　事（こと）　俊（とし）あま

そ別封も不成而乃ひこう字船れたなりまそくる而へーー

まそそけくろおろ　字舟ひのうこと今而里也

ゐづくのふ　おーまたーそ仮そくとをろ神也

ゐうこそうえ也

人のゐひそ　ト方を掘（ほり）てのの字の詞母なくてる物とる蚊

物そめれそ二人ーそまーうえひや

こうきのほと　愛（たに）乃みーの詞　ここさまおそ死舟へと

おてけくろみ旬　行のの字のれやもみおるを救も　くりて鎧（よろい）

おもも連ろそそれ抜るれやもみおるを救も　くりて鎧（よろい）

よをたろこ雪ゐか抜つそれーさみという

おうなふ　中ひとくうれてて　まかりおひとと元
なくおひとと元
うのことくゐらて　かた中ゑへ乃文言
ふる色　おくしうる色けるすあくとるる
ものりきおくこうんそうん　完全文言
あぶまんも　せこみりきの弥うてそうんもいうくそも
おくさみよもろかうん　中ゑもを拍思ひ　文うえ为称もや
ちりかたんとなり
たゆふのうりこ中も　中ゑのの参
おくるおとろの　れとろ服乃あ
ほうこう　うき毎も中ゑへるを

あひさきぬ　糸結　善おひの
うかうう之之　下略完
きらうそれ近で井　出君　外様むきをりくる
源也納を　衣服のかれむこる
却氏あく　かおとそうひむそ
文ひとそおりふるとろ　注の書り
このほうこぞ函　中ゑの
やうみのすまくぬとうみ
てもねくりひまれなり　思
むほろーさておをそも
くふおやひ　八文ゆる

ろう給ふ　中将うき事の母う
こゝのうちそ　ほゝの母のたゝめ
も　めしけうそれうのまゝ
あうそう　うきもの母ひと云間人不通して
文わうそ給　旬
こゝみそ　うこのかた也き人もものみそうや
ものまうあの　常陸宮の子　宰伝兵人式ヲ蔵うけう
なう也
こハなに人う　中将そ伝とうたれ人そそや
うそはゝ不附ニ　其の事ともうものみを切
ゝ

おとゝの沙とみまはなうへし
七夕ほうう　契うんひうう〳〵ゝ七夕
ひふゝのあのそ
わのきこうゝそて　旬かのや
こゝ　八文　朋壺のほうれ給ふ盛光（イクタ）
なもくゝそ　ほゝさ海事や
ひくあの乃　給（キヤキ）おりと母ゝとひこものこと経うあ
のゝ限（カギリ）あ事とあゝまのゝ
おそゝて　我宮そめ山
れうの　女房九我く云詞
ゆ事ゝうれやせうなうひや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

いさこれあるを　浮舟の
里ならむと心やすき
うの花　うき世はやみね郭公
もののみそ　句
山ふところ　幸い不及覚抱ふところ
あくんもうるさとなり
中くく世のつねの　母君を不覚又妻を世れたるひる
なく大のことも
あるさま　なくもめてもあくる
大将殿を　うつのかた詞
世のきこえ　大将殿そこ二条うしもせのれたる

いさや　ふるの袖　句やうとも
大君もかニみとうくやう
ものをけり　かま詞
一をも　豊乃一中ゆへ
れとそみる
けふむくれ気　中詞
人のあさけく　中　此我
むけふの　此家をよの遺言(オコン)
うち鴛乃　陸奥守そ下し時乃事をもり人
温室の前のうえ入くう浮鴻のうえて思ひ乃ふ世也

[illegible]の男 世中さがさうやうに我为一れたゝめ
うなまゐるの
ゆくも山の そてひちもの守て義後(ギゴ)と經(ヘ)ゝ
おくあらし先 志の山まて入てもゝ会するゝ人ゝなの
まゝとなり
よのつねあやし 守れ子せなと我をとりとめんとする
为と思ひを 小方と成ゝるゝぬとゝ云むろ
中性である面をいやゝゝゝ
かのうふみて 小房前のうとみゝの小方強(シヒ)ゝ也
たりゝあるもみゝをなゝゝ 衰(シヒ)なる強也

ゝゝ強よのみゝ 字母(ジボ)れ小まゝ
とや 思案(ゾンザン)ゝ入もゝてゝなる
ゆるり 禁中(キン ヂュウ)ゝる活退出(タイシュツ)
文ゝる乃 中文ゝ文章の活(ハ)涯なのゝとなり
あなゝゝて 活不条ゝ中ゝ乃活(ハ)あやきゝるゝと
なりひてとなり
おゝゝたゝめり 双比(ヒ)
つひ神ゝゝのすゝるれゝおゝとうや
なゝ そおなくゝひをてゝゝれゝの大元代ゆうの事
小町くの約ひて中君ゝ又ゝゝくあゝて思ふや
名云ゝ不ゝゝねゝ実(シツ)大元の忘(ボウ)ゝゝ中へも経ゝ

見来てそ心のそむくと中〻あ
はうきさせさせも　おぜーとみこうーけよせーみこさ弁
そうをすも脈うきるうれ　みそさそ恵せてとほ
へをけるも也　ほ母をたコ姫恵の形代カタシロみて甚子思ひ
けうせんとうや
いてやうのかる　甚の山里せ
乃佛とたーんとの給ふ事ら富本乃きうりめり　甚詞
うき母れさいけき通や
称うひこてて　そ海岸さ女
ゆくく　のれくたーを中〻山あを面とたり
一うきほ母うり心とうめんとも
ひもむや　ひもむうてねもつそ好文芳こうとも
ゆーも　中恵れの連前いめきりの幸ーてても浸くこと
給へまうき船へけくへ給へとなり
み一人の子　子て抱を人形せ拵ツカキハク　人敢上をノ
架祀カケレ乃具グ　婿恵れ意ーさ浪立タチ慶とも甚乃心そ人れ
とけうおよめり
みうき活せてにいざさんま　中なて通とろめくるる
向フコ浸かりす抱るれそいめ〻しと浮母をうーろとての
年なるて
ひて　大ぬさのひもそめ片
えこうものねさうれ

作れふ・たぬきとをよこうたそ
をこあるといふものと
つねうちをそゆうるを　もとのロン
水のあを　世中を観じて
男上とうかれ出てそんとの事うちいふんな
會うの詞や
ふてゆ　いてさこそうこ
はたなけるまうハうな白母へそうたなくれま
そ物うれやせおされようとなり
いてうのくこを　其をおれのうれくこをとなり
やうやのうろふ　乳母（メノト）のおつ君うかくへこ

と思ひこそうと今みてゐる
そひをめれる　東國の人をいる
夫川を　業平を　男是
ろうぬ　ろ紀もうのきてハうれ
きやゆうとおもへを
呵く　ろうくなとや
うのおうつきを　着（モシ）て人（ヲナコ）
讃岐（サヌキ）の君（ノ）出（ヨリ）来（キ）給（タマヒ）へ　薬王（ヤクワウ）丼（ナド）の事　思給（オモヒタマヘ）隙（ヒマ）
擅香（センノ）　花華経
こづをんたん　擯記　彩成
山階寺（ヤマシナデラ）に移（ウツ）し奉（タテマツ）る　歌梅檀（センノ）木（キ）

長徳（チヤウトク）二年（ニネン）十月九日於（ヲイテ）

山ゝ嶽嶂の次(カヽリ)の如くうち云ふ
まゐのとゝ　答　自法(ジホウ)うち
かくけを経る　寝過(ネモノ)若不(ワイラセト)誰経(タレカ)若之
き〳〵弁さを　容舟の如
けふさいはの　答　当今(ケイ)
うの世ぞうむき　容舟と尼(ニ)なとみと思ひ給ふさやうに
おりひゐて　嵐(コロミ)狂人とや
ゆく〳〵　ひとり教ふくのうなり
香の称　右今(ニ)之(ノ)句おもきみそぬれく山のみちさ
と人そ〳〵うん　奥山へとおりのみそさらおりて
ゆなつ〳〵てやそのひ　ゝゝゝ

ゆめ〳〵へなり
いとつゝうつゝ夢にて　やもめ
ゝうういかゝとなり
いちや　答　ふうしふ
をびやうす
答の中　ゆりなん答の中よりも風そうしきの
るもゝきあてこゝろうん
この御ゝこと　うへ事
此車かとも例なりて　親の車
御車の時毛車ゝゝへし今を綱代(アジロ)
おぐの車

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ものろう　ひかうきうく敬といたん事あるくと徒然
のとうめたる
ゆうづきを　うきふねの事
車ぐひ　ひとち敬を徒るものくと
るるをたてぐ　わもうんと事
きゝたてくふかうするふ
ゆする　髪（カミ）あらふ事や
きふるき　髪あらふ日を撰（エラ）ふ
九十月　日　非亜月は　いむ事となり
見ゆるおめり　なのむるやうや
さゝれ過うふ　旬（シュン）朔（サク）へ朔（サク）をかくへ物くふ人を

大おろうや　かゝおうくこひうる
かくおほ事なる　うろ事るれや
れまんなゝぬ　中売れおまんな
まて詞多とや
文を今　ゆするうる中売乃後里
し波おろをる
扇風　笛を袋（フクロ）うへうる
右近て　中売れうるの声
あゆは別人れ
みのうくてうるくに　あて
のくおくえうとおてふをやれ

うや

ものまうふをそそき　おそろ
おもひおらん　めしもの詞
見給へありし　こゝろへひ
心ばせなけふ〳〵そそ
おもまし　わう妻め心あるこ
つとうひて　浮舟ようひて乳母（スウト）おとゝ
いくり　ゆめも中〳〵めや
心ぐるおもの　ものうこと
ふみとも返やり　（シンキ）お妻心ぐる
ともめくめ給もふや

いてや今　いまやうこと
ゆ心おらん　ものの事
そうやまんとも

年のもりはて　浮舟の
十旬へもさうのせやさ
をおをうひるま
中務宮　今上の御子　大よハ　中宮大夫也
左衛引　大夫の車を年
人のおやを見　対（タイ）の
よ所のうへもるれ　中君
うすの御方　降魔（ごうまノサワ）相　不動尊　忿怒（フンヌ）のおもて（サウ）あ〳〵けた

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ろ心ろや
てとつませ　つと守(モリ)ろと白ナ究乃也のてとたた也語
ゐろ羊人多もの抓よあさう不似合とゐへま
うの殿ろハ　ひさち殿也
ゐらうと　ゆゐ事
もも人ちく　トくまていさ
うのは事ゐら　ゆゐ於ゐさうひとを雅うとや
ゐへま及文心名字舟よ女付て迦ろしよろとても
表そさ　うへ多称
おりろうせう　又なさそかきそいかくれともも
あ所を心高(キ)多思名(レ)多門しそとなり

そつせ乃親者　ゐうくそ利ゼありうへ多ゐて不穏(アンヲン)礼也
備并(ウ)もの緑(エ)亜緑(ミヤツ)美(ビ)ゐのろへ
あの表　ワの表
内ちの表　而礼くそち禁中へちりへ旁也
うろし馬　殺(ころ)の銭(ゼン)亜るとゐへま
ゆするの名詩　ひ(エミヤウ)娑婆(シヤ)貴図(ヅ)教閲(エル)書沐(ユル)
自まうろき　騒
ひとはろうく　あ人へてうへあ乃心とりふ、枕中
表空釈ひていとおへく浮舟れ心とろ也
大ね乃　中心
みそまのそしく　自人のむ心と中礼思名也

おもひなん　一定曲(ユ)もそ
そう事(ジ)もそも根(コン)ミふかゝるこゝろ
あの君　芸
あひなく　白(ハク)の不(フリヨ)芸の字ゆゑ
其の男の　中君今ハ芸字ゆゑ
一男なく〳〵文をみれすてゝ
このふく死　芸の中へ
とうこのかうし　中君の
さめやうふ　白の事　とん(トンシヤウ)芸
もてきみとなり
いさゝのまても　字毋一向世(セケ)
れ〳〵かう
うへと　中君城
みこをはゝ　おほ女人〳〵
里へをうを
抱(イタ)くこと　中乃字船へ
なりひうそへ　婦(フ)君
芸の沖心ゆ〳〵　婦乃こゝろふ思
いふおこ〳〵の白　けふ
てゆの〳〵う　八文と
いみ〳〵うおほをおこと　中君のうを
白のひうりうそうひなのおく

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

あひてもなきぬ　さ寝をなくてぬめり憂のあひて

もあてぬむちうちすれ

うちうそふき　内へ参らふ四位ほをうひうひしとや

いひやことゆく　別れなとてまてや不参とや

ゆうこを　中将

御かくこそ　あて人も玄象（ゲンジャウ）の也

夕つゝさ　めれとく母と来るを

いさちの給らん　いさちハ聖孺（ヤコ）の姓名也別離（ナンジャウ）を愚慶（クチ）

有御とうふ心也心やすくも又よゝぬ守れ（ヤ）と

る死なく心あへも参りられとも

そのようゝぬのことふうろふ（ウスル）と假寝（ウタヽネ）て深かと

あなとへと云むやいたうをうそし而ハ面

のをとゆてみなり

ほうけうふなとあるうう中詞

さいふほりとあるうう中詞

心れとおう　自文の不思を母そ切の心乃鬼（ニ）のおふ

に中を行をお泊さめもや

みさうの　不変（フコ）小山縁（ヨリ）とも也

帝かきたら　白れ白なとも也

指弥（ヤ）をむひうひするまゝくふ不等（ムラ）もや

ゆふ　八文のおふうあうそさられをしてもしうう

みをけ又中乃沙心を思たりるそもるなり中

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

のみとそはかまあゆうことなり

あとやうるともも　ゆれそこ　不思儀なる家野なりと

もむ家となくらあとなり

ゆくゑれなそおもふこと　可弦みと中へあつまても

又不思ありてはとなり

むちなく　むあ人なり　あ文と也

うの家中も　ひさち家そも　ゆくみをやさん

ゆこさあまとも守（カミ）の子共ふけとおれてはとおとこと

ざうじ（ぞうし）雑事（ぞうし）

つう無人となり

ゆこふ　ひさち殿

もゆむ　母の如（ジョサイ）至（サイ）て服とも

あの人そーもり　ゆるなも

うの文乃れまへ　白おれおまへまて　ゆるなも

ともふ　うろうんとなふ

にとまる家うれ

人やもおそえす　ゆるむ　比興（ひきょう）なるきむなる

つふやの子れと　ゆのむうまそそや

八文れとや　空てのこ家ひ

とあゆひ　家母の母　うき

まのもぬといそ　娘（ムスメ）おうつ

とあゆおそ（ヨ）れるひまや　萩みそとおたせる

宝木などの
右京 八文乃やうに思ふ人をもとめ
ありそうもなくなり
あひおう あちきなくみあや
母のさ人を 母母の母れむ
君う母おせん ゐねや いと
女の人れありさ面 れと
ゐてもむ(スタベッカク)楽男名なる指と也、
指の者 三条吉
あいにくぢう 句おれて

母ぎみや 父のやうに八里下しう
人なるの(タクシ)あ外の対をもつてひきて母兎と成おけ
てみをこせをむ音よ母むうきあり
ひさあるおう 母母 世中みあ〜ぬおもてうれ
年ありおう形ぐさん 家又糸中るんを山陰
おりとのふむや
安世るん 母也 我方を山吾ゐとしてそうそあ
とて母やうるる多——度とや
なとくく気 自他思むとめ反めりくとめりるよ
まん人の用むうや 仮名の筆方や
さあり包てりうも 寝殿(シンデン)と修改(リクリエタメ)をも

山寺めぐりしらく程なく人々も
さしたるくぬ事 ともなくぬや
小家 三条や
うことわりこて 宇治へと中
こりうやそ 幷出家あまとや
滝殿山滝出とや 亮子内 河すゐ霊地と人古事
二年山と不出源帝号紙をそめ 柿下紀伊守と淑霊岩山ず
十禅師と捕をこれるとて 僧官
ありおかく 不安名生 河を用て
ひとわさを 衣生垂迹(サイグジャク)形度(ギョウド)
行しおもなくくれ掛と多そ
きくおく かなしいうことなり
あさつてはかり 車通(ヨ)ふもんとるを
ひのわさ 門たの色なとある掛とや
あみなく おく蚊のそ大河心
ちりさ花のよう 三条掘者と葛ちの死るる程よ古文
とも世ふくとや
みりをそて わさとあをて月のしくと思うんか
とふとるを

いかがなりめ　伊賀新女　云仰記にあるたりめと云こ
うつゝなのと　どゝなりめるこのもとまで
もりまりそわすする（イノリ）事をいてゝ　猟（キリ）をたう免と云免
猟人をこふらうす招（マネ）する嫁すんとなるや　伊賀伊勢
のことわさの　平野来払うたりめとや云仕そ
久そやをかるへ免と　ひさちの守へ大和文を作うます
なとかやいかゝと御用捨（ヨウシャ）被勝く
文うはらん　女二へ　蒸物を作免れ也
うひかうす　花　菓を作免のうひある時心となり
しはやめ死て　蒸いは門の婿（ムコ）るれ堂をうと後親代

あさくいめさわくとなり
こまこうなこ　女二をあくこうをもくるへ免由
なまをふつゝきむを文つり色とめへ里
むけうえわさゝ　宇舟むうるる也
のうひまぎ　あさいてと代ゝ一日代まこ也
はあこ里の人　舟　八文乃はは代うはあなり
う治もり　う治もりと云て蒸の門攻さう被入り
さまやあらん　門方そうろうてあゝんと思ひて
うれとも　舟のあるせ里
うの服にう　ひさちのお方へやーさんと也
文とてうさそならん　舟の詞

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

やうの　左京　元服二私ざ治しり給ふ頃の面白ふこ
あの人の御車　車とゐるの出をうして門をさせとるを
かくる人　攝門（ケンモン）の内京極（アキ）通るすきをも
むくくし　かくれむ
さゝく　御ゆもりくるあの三輪の濱らのくりことる
家もあくなくう
里びさる　上崩をのらぬひな
山ちとめ死さるおとのむなり
らーとひる音　宮阿字方（アジヤ）へ遣（ツカ）はしたる家とのみさーと
ひるをやとをりて久しやをとをとせる
ゐたて残らん法人里

車のさやれめきりの音そくきあ大きなくらめる多
独りれ　車のうこひ其方をいの也とあまそすの
こよくせ給へそをやあけてそろひあのむみや
ひさ多こと　やをやのへたなそとり人里
かさらひ給ふへ又　書損ずく
おどろ　相うち弾いさくたる楽打（タヽ）と足引（ヒキ）をなる
へしをおくくうをうこやや
よもきの浦ろ秋　詩思（シ）院蓬轉（オウノニテンネル）車（ルマ）作（ツクル）　よをきの
う勢ふぬのれたろの如車猫（ネコ）のもう　やよもきのきのき
言て一言めされさる心見
それく　おりの人夜ぬて外や

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

九月　なの日の　九月ばかりや
十三夜　せちえあすの　月をや
のーあも　うるはしき人あまた
物をあはれとなり
人目とも　浮舟の袖や一人と弁とや
ぽうぽうし　法性寺八　貞信公遠忌（テイシンコウエンキ）の人々
門うち入　沙汰のめでうるうるとそうあくる
名たのみ　車ゐおあくる事
一うそ泊れうなの　男女同車（スダレ）とあくる事
あるゆく車乃中より帳乃かたひらをかくる事
てをうなのうち乃舟と笠とを同うつなるこ車れ様（ヤウ）

未にうちをうちてそくや
初ものめ　山時うも（ケウサウ）画おや
雨もみの　浮舟をふくう祢と婦（ヲンナ）
なをしれ花　あを花の　あふうつるそひえれ事ひ
ふうも　ことへさ時分なるをとる
あまたの年　葛九討
きーめくして　寂うて
こめいうも　右姫（コヒメ）

むるー　き　ゐの音そむなーよそうみちやー
思ひやまともり　かこのなき
れてもあー　女もろろくへ文はかと法用枝
あん系ハ　らうへや　少乳そーてて下車うや
わさとふ碧よ　下車礼気ちは法ーて始狩なとを
へ法へ文ーてもるまま物ととは
みちを志け　道中を黄未法よ山殿ハそれくーえなり
ねるへ里　うえ西孫
むーのいと　女姫九折
文のはく　中表
あるまりて　志てもさぬむなるを
大色うなるも黄別も又安そのとなり
ものまうれらそ　不用ふわうんと也　ううーろれ
いうく婦表真る字というんたなめ
我つまそいふ事ハ　あいまの翌ご後ふうううを
我事と云ふや
うの山ととと栗　ふれこと也　東琴よやさとく射て
の地巻返法可法也るうやや
ねるさぬなるて　双地
そわうのたいれうへ　斑女国中扶扇久　麹玉壱上殿型
弾　斑女を坂ふすそられるる古もと約法も不表して
下句とそもるるや治後をむとられるとも　白扇と

ある尚侍そこにゐて物へ
ものこ ひさち殿りそこめくくし文事はりまく
琴(コト)ものる斑(ヤ)竹(ノ)国古事(ヨ)ものし
されを 意を尽(セン)詮古詩やや思ふや
めくく統ふ おくこのめかる国ととくめ釈あひさ
くく相うきうてみくんとなう
座とり来ぬ 年 前寒ふ意の 夜とまおとかりひうて
をやまのかれ振袖もつうふさひ〜のふらん
ひあをと心出きり 文のもを婦(フ)子ぬ〜ぬと云むるを
もつうくも 婦元のるすをまめるむうりたる硯を
ほくしやなり

里のふもふ 里ふ元も葉(ウキ)くと云む 婦元の事み人と
今も如当葉をや
伯後ちん 色ふ女あなうちなくくて弁への意乃をふや

浮舟 ウキフネ 三の巻 トヂリ 薫女六の宮を女ゑ戈の九月廿七日
に迎取奉り 三月末までその事ありて
文ども 白の浮舟と二条院乃対 タイ
あるまゝ
うしおすちの 中将 ソウジミ 恨給へる
月日を経て 白ふのうさまゝへ仏
いつしかと 侘そして白のう
なきはゝうへ うちうへむ

ゆゑをなうう 白ふあくうれしなうる
そゝぎ給ふ 中乃ゝ優 ユウ 也 ソラ 事にやなおとめ
ゆれをさ猶えんゝ折ゝてうえ西移乃り来
不定 ゆゑ
その人を 薫心乃やのふれ
くゝハてゝをを
移ゝ 志ゝゝくゝをてをみよ
むろみちなゝかくふ
引の色て旦里なゝといもん用うや
日うすを 山里ふ日うすへ移
宇治へ垂ゝ也

うの心ども　うち〳〵の事ゆ
りとれ雨　宇治とりはるたち
いのくとなり
遣水　双地
わさすべく気　三条ちのき雨
もあーいと海　大納言とを漫もるまも又浮舟なとゆへ
うとくなるへし
えたてまつる　中君のかとへ回掛よりめやうの法吉信
なとあり
世中を中君
称ひ海さり　かかる句えれ
とよしくを蓋を思出給へ
かれとたいめん　中のかきかへ
年月もあ月日を包さくゆ
べくの経こと　経也蓋の
不及ニ兎角ニ　沙出
しなれまそうたうりえてる
不審ナル　由来ヨリコ多
心ねき年の結目心
中くかう　えうり中君の心
おなー心　中れのさうりわさ
おくふ私蓋不要なり等のゆうとも　文のうへを

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

其の中にうちうひ汚くいやしき上臈の事
いやしき程こそ物ゆかしけれなどひやうしなひ
汚くこゝろ一なく汚くみだりがはしく
心そうもやうそ汚くむつかしき嫉妬物なきう心あら
事や 河の五文とありけるいかに
たゆふのおとゝ 大夫殿へと云むれとゝを殿乃字
迷ひれまへうそそ 中売乃法師ゆふ法師をん
とそ思へさるとゝ云や
うのこそのみと 妻の詞金そひけこと絵まうう
てなやうなり
大夫のりやれ 大夫のりもとんと云詞

汚れたのうぱぐ〳〵 俗るうと思ふや
うれからん哉 ゆふ少用捨や
さそみんよ 中のさり気なきもぬまのくにゝそみんとなり
おそろしうなくて 宇舟の文乃詞
山里乃ふせき 拙思ひ付きとの心なり
沿先とそ
さそ又五文とゝ沿先を
宇舟乃ふ同とたてゝとゝや
年あまたまそ お迎の大補のりとへ乃文言
あくうへいとめてそれ
りひてゐて葦ふむめのくをときゐる人る我浮舟を始さ
りのすゝゐや

作くまゝく　句ひうきやかのうへへおひ事をか
かめうとなり
うつち　持統天皇三年正月天皇(スメラミコト)初(ハシメテ)二(ニ)
しゝ卯(ウノ)大学寮(ダイガクレウ)ニ　献(タテマツル)二(ニ)卯杖(ウノツエ)ヲ一八十枚ヲ一
年中の悪鬼(アクキ)をおひ(ヤラヒ)はら(ハラフ)ふ(フ)用(モチヰ)て年中(ネジウ)わさ(ワザ)を可(ベシ)
なし給(タマフ)ふ(フ)事(コト)　打(ウチ)たゝき(タヽキ)給(タマフ)ふ(フ)　卯槌(ウノツチ)ノさま卯杖と同之
まさおりに　まれ枝(エダ)ふ山(ヤマ)たちけ(ケ)ふ(フ)を造(ツクリ)出(イダ)して(テ)ふつち
と枝(エダ)つゝぬる(ヌル)ふ(フ)　杈槌(マタヅチ)　卯(ウノ)日(ヒ)来(キタル)太布利(フトリ)ゐりく
と云(イフ)ふ(フ)なとやうなり
まゆふきぬ(ヌ)の　浮舟(ウキフネ)のひ(ヒ)ハ中(ナカ)ゆ(ユ)ひ(ヒ)ぬ(ヌ)をぬ(ヌ)ひ(ヒ)ぬ(ヌ)やう(ヤウ)に
物(モノ)ゝ下(シタ)たうそ(タウソ)ゝ(ヽ)ゐ(ヰ)ふ(フ)ゐ(ヰ)ふ(フ)ゐ(ヰ)ふ(フ

うのとのに　内記　蒸の内記
とのゐのあそかう　あそかう
いとたのひて　さえへ　文事
いのなる　色うの内記
あ尺をらうにすん　内記の巻
あのわこと　蒸と中売とう
ひとをそうてうこ　服
よろ〳〵人イ
はう号　賭弓の日十八日年
て悦の詩と作
いうさめ　親王なとへ
もやう　白のむ〳〵
作やもにさふらひ
ひくうさへ　たう八子
きふあそよも　よやとふ
あやーえまて　蒸の白
う中売と也あるみ去
思なう〳〵也
至てまき　ひやまよ
さいうて　去内記内乃弥

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

へ条てや
いよをを　新不の浜や
三日人　ゆうちめん
うのかりの　二条院ま
お返とあのう——　二条院
きし人や　宇丹のめ屋
むをものそるとそ　お入て縫
わるらせ給まて　母うへ移
へしあを来うちなのへとう
おまーを　ふ移れ宇治へ
そくとのう

——まをとや中く三条宮
うのおとくふ　宇丹れか方
あのまふ　めれ我宇治
まる乱うたちて石山へ条
りふれる拍　白乃二条院
つと　まくる先れまくふ
かくらうしく人　中
たれ人をなくて心とは
いくう　宇船乃乳母
うのは事　中将乃ま

又石山寺乃坂
ふそおそ
ふ宇治へ
母乃所へ
ふ
ふ
ふ

よ一所の人のうへとものくやしや
なかりける 親族(レウ) いとなむ
よねたう うきこともみきけれめ
て坂東(アヅマ)へ思ひ立(タチ)ける 児亡(ナク)(ナリ)なりて海(ウミ)
あてなる 上臈(ラウ)ふたりしふきな
なのみ 其の家司 大蔵大輔伸信
のこりて
みちそへて 道(ミチ)そへぬす人(ビト)
ふたり 已字 先そこうく
なとるを
其のゝち 其の後(ノチ)
我の方へ引(ヒ)いるり
あそれなるもの なりひさく
特(トク)かにおもふよなといふ
云てこれ祈(イノ)へを字母乃
ひくまうでしに 旬(ジュン)を二
もまいなり
いとる 主(アルジ)ぬそなたにせんいり多のために
人をこんまくかれ
時のこと 時(トキ)の 白の宮司出家權守と云
ためも 受戒(ジュカイ)とても不叶(カナハ)ぬ
あやまれる 二條院(ニデウヰン)まくかりのことなひ(ひ)めりける事

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ゆうこと　なお此の時の人々と云ふ心を成べし
雅みの　句さうくと云て時うつくへはこる也
時うつの句なり　時うつの詞なれ共　事なん
とさうするうちにふかきより　つまり
此句
海めやの　うちとけても　栗強句れ共
もろ人をおとなり
名山うり　茶の茶箱のうち（アラシ）増乃
ふかい　月の遠（サハリ）ふと云なりてもよめる
俺（キヨシ）ゆへなるなり
此てうつ　惣へ乃詞をそこに心よけ過ぎう治ふい
まう上臈（ラウ）の沙うこなどうれまり
さそうこうぞ舟の上臈うれなりて
せうへと句れ沙詞山儀む可強
女いてうぬるく　此此事もうくめくしらふなり
茶うり到（イタ）さう放うや
おりひ出ふこ句まと　句
うぬをれ　ふか此詞也　名茶一ふくとや
むう句れ人　母のかうこうなり
あの人くく　此道の事所へをやる
よべうり　月水ふとうこ云
うのたいれう人　事うそれとうれ此也

大殿乃　六条ゝゝ院と只今そめいらゝゝ思
召をれ
まご　おとゝゝる波ぬひそまゝゝ不安と思召や
おうそかよそ事　句
ゆゝしけき　事の注
ゝ波ぬひ　ゝ治遍（カヘ）をいのゝゝとなり
つゝゝるゝし　二条院ゝそ乃事
ひをそゝ事　人の心安（ヤス）なけきは今のそれ不限（カキラ）とや　深井
ゆのなる人れ　ひおゝるゝおゝひゝゝる人りとゝもや
ゐいまぬまを　ゆゝゝ垂（セン）給事をゝ悩（ナヤマ）や
ゆゝるゝや　双

よさり　私句　書て被をうけて腰に宗へ乃包ゝ時方
　奈ゝ
ゝんぞう　見慶　ゝそなるゝ人と云ひれ
ひゝゝ乃ゐそけく　ぬハつゝふゝゝと云よめゝゝて言
ひゝゝと云ゐを時方やゝ　ゐろのゐて申言のつゝハ
ゐろひんゝとぬわゝゝを時ゐ此殿ハやいつり
ゝひてのうゝゝうをゐゆりゝゝゆも　いそゝゝ
ゐなき事ゝるれたゝそゝゝ
人めもし　悼（ハカリ）ぬりゝとぬ　ゐゝゝひんゝ
女のたゝひ　世上乃なゝひゐ我（ヲコリ）誤ゝと言て言ひうゐ舟
をおをてゝをひてひるゆゝ　ゐゝゝ

そまん女乃男せ止をゝく思ふすも
独乃中　あのさるさ〻独乃中ろやへみやん我ゐし
升れるまゝむちする
せさ〻〻をゝ　句　むやそゐも
なみさゝ奇　字毋同
をれの　志のくめれうろくとうけゆあをゝ升う
をぬくなろうゝ礼〻ゑ
この又仕　肉記と呵事となり
二条院
むちろう　まか升討
人のかへゝ　中葦へ句乃ろる死迩まてゐひきはゝとゝや

さめやうふ　中の心
いのやうに　句へ葦れむ中を何と中なるそと
おもわめさんと也
海とふはゝ〻　まか升死む　俊う葦の寸釣てそ
とや　但句も中のむ我つゝもわりふ事とゐ去そい
うくな海さゝ超まとやめ
むをうれ〻ふふなろ
人まへ　葦ゐをわりひおとゝ
可法
はむ乃あるさ　句ふへ陶心あるとなり
をくせをろの　陶心〻そうきゐれり衆をゐく〻し

給へとも高貴(ニクレシ)なる不通(ツウ)のあひだ
いつくまでとそん 宰相(ナカシヤウ)中将 事いかゝ
すくろなる 葛子(トノタチ)の婿(ムコ)なくて式部(ノカミ)嫉妬(シツト)孔(ヒドク)悪(ワロ)なとするも有
ありやなしや 奥事(オクコト)のおそろしきのみ
中〻句(ク)へみそんをそろうとなり
きのみれ ける行(ユク)ことへとおもひ侘(ワビ)なくも
おやまうくおそろしきとあまたも
心ある冥加(ミヤウカ)有(アル)条可(ヘキ)恐(オソロ)うそんと
ようやく 又御心よろしくそやの集(アツマ)へとれ
かたうさ成 句心(クシン)して 如此(カクノコト)なり
又明日(アス)もやまうきおとうかみれ
ぬれみて可然(シカル)
大(オホ)きうも 二百三日(ミカ)とも 中文(チウブン)
しおすへ
ちごれ給(タマ)ふんをいのうるれ
ひろ拾(ヒロ)う字母(ジボ)の心(コヽロ)地(チ)思(オモ)ひまく不条(ジヨウ)とや
文(モン)も 中文
ろうふ うすおとなり
ちうろを 新(アラ)なる人へと思て筆のさ
さするをあまり費(ヒヤ)しるむとやも
速(スミヤカ)をおり うう のをおもすまて 双(ソウ)地

の訪ひやめる　葛（ツタ）の葉たてさわ〳〵と殿守人やも寄
　糸乃事ハそりひ出ぬなるへし
わのありさ哉　白と葛よりを浮舟ハ思ひ乱〳〵ぬるとも
うへこそ　宇治
うれふ　白ふりハ又ふりくへや心拙のふりうへ殿守人
ずんざ　侘者下人やた夫ハみ伝の人なる哥ぬしのおれ
む迎のめく〳〵　右を彩簡（レウセン）や　お迎の葛心ひかれ人を
志の今文の葛ハ依（ヨリ）そ
ハもたらぬ　四月
あくまを　う文船のりこへを
ふりかな　うんぶく〳〵
ふうり　白ふりハ又葛へめんとなり
わまを年比　白ふりふりふりふを皆年来
思人ともおもふ〳〵の詞
ふりふきて　又ふりおれ
さんるなとるを
志しふふ〳〵と　のうろ
りふる　心まを下ゆく水のまを
いふうきれろ
んかりくぶ　白ふ葛ハ
わもをするふりさ　宇舟へ白の繰（ツツ）迎とやまりくる葉（ヨウ）なり
人を一人お泊しめいまんとなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

月比　葛乃葉を招と見給へる
あちのきゐ　家のををさまりうめ水の音とや
わさしてんと思ゐて　詞かわ
ものへ　白ふも墨染と又造給ふうみやうふるしの今そ行
法むもへれ　葛の葉前くをうみやうふるしの今そ行
くやらんてこうきれとなりう
つつさちけ　上旬中旬をすぎろとうへ里
さむよをさそれ　犬のくさそ鶺やす　家のてを鶯とみてもて
張りそをへめくすおきくれやさしきうてなる
つし　葛の葉雨之霧初寒汀蓼
処暑手傳風　雲脹
鶺のわくすやいりこタ雲乃雲井ろ　ろろきこ初の抄
ひ雲のうくきの文を白拍子たとへられもを拾り
よはて可用くふろ
長菜と葦やをいひ又恋まの美ゐめと云あとくれ
業つくゐ
いとくめくらぬ　ほ舟とそるまく人玻みそ引くあくれお
らんとるる
郭翁　初中ひるる人まくるしとなり
宇治拾遺あやふむはとさくれるをうおや
今又給てん　糸へ反うそひうつんれ
さしすりこ雲　ほ舟むそぬや

肉ろく　肉窩（ナイエン）

まくろなる　双地　好文也

大和人よ　白乃地との外ふもの

へ出ぬ人を

ふるそ　ふの和代（ヨミ）言そあやなし梅の花ふうみ〻称の

やそかくまく

あふさーき　ふもと詠むむ

まろらんう治のけ姫

治ひ治くく　意乃地そうまふ

ふもひのく　つりへ添字年人や　意へあそろひうんと

ふかみ代治ひや

文たてまつりあふ　先祖（ヲヤ）経（ヘ）紡て墨（ヨシ）初て　詩となりあへ

日作文や

きよけなり　白ふ

うの意をおすほと　白と意この年相遠　源氏一部

日めし事多之（サウシ）荘子筆方を模（ウツ）しふ所ある所

年くお遠のるまの源氏ふ投い意乃年ふと用い

昨へお遠とむけて玉〻し意を白文代次年誕生（タンジヤウ）

作文すられ　作文ふ成今ふひやもの通治ますふ

母代事のことなり

うの人乃　かふる代あふこー文なとはー治ふよあく

ろうれて字治へりふ治へを

京うへなきまつ　春のまを絵とするみも侍まつ

内記を我ら少捕　大内記ハ　詔書(セウシヨ)並令信記(リヤウシンキ)などと書つ

うさや　式ま少捕そ　獻策(ケンサク)首(カウベ)ハ試(タメ)なとけうさうる機(シヨウ)

まる　式ま有試及第(キウダイ)なとの事や

ひえあま　りくらなとや

むさゑもあふなのらめを　受奥　ひろうさ人をとり治定

玉明乃月　俗文十日ほとを少移へてくらまるなるてし

ちれさる　おまれ　こひくさまと

年ふるも　白　岩盤(トキハ)　ふくみる目や　あくかと橋ふ

楠の　浮船　むそぬや

みくさまつる　何うこふとうみる目や　あくかと橋ふ

とをわくふへ文道甲優すみる目や　むうけとの

なとも名許てとするうや

もろよのきり　あやなり

ゆのふりをふ　いぬうこれ底山なるいや川いさと

あくくてわうふもらひふ

拝ひえもくめ　何方を主(ヌシ)と思ひてのうけくや　何まあ

てしらひうまる許いくへもせをそのおなりてし

うの人の　蒸へをめひおとくうのうるうとや

のみくくめ　衣のさくふ　百ゆり　けくふ(スミ)うて

ゆうものゆくそるみくそれやみくそれとみあ

あふつの色なとする許や

をゝゐくなり

わのそむのさ　浮舟乃心

浪乃雪ゟ　みむそねや

こりさ山　山ゟのこりさ

へそうろうもり

ありみそれゟ　浮舟　ナカラ更天とそ白と思ひ

うさと思ひ分ゝ侍へしゟのつゐ

あの中を　うるへをひくうと

泊うなとたてまつり　右近のあ

たゐ〳〵　たひ〳〵そ上もや　神樂（ヒラ）

きり魚ろと白みゟうき舟へさせ給へ

あざやぎさま　可」弦成ろや

泊てうゐ　白へてうつをさいゝをゝ

ゐくなり

ゐ文へ　女一文へ浮舟を第〳〵せ

そ礼かとりのみろ　筆ゟあれ

ろと　拵（タイ）とさせ海ゐゝ

をゝ珎てを要望ゟ而

据てゝも　うゝみてもるそてもいそ

こゆろうをなゝさゝて

ひをめ礼ようむ　ひさちのひをめ

先礼とな乞ゐ一うを泊へ祢ゟ

そもゝみゐとなり

ろゝ元　うそ乃称乃母

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118　　ガラス使用

まりの心ゆる 浮舟の心

給はれ 匂 とそ給りひなう〳〵

おり〳〵ことに 宇治へ 匂宮の事をなほし〳〵てや

わやのやうこと たゝち務のれやうなぬとなり

せくもの ゆかの妹(イモト)うしあつまれて

めやや 御せうとともおやうなう〳〵

なのめやれ 匂 心ゆるや

ゆめのち うえあれる

のうへ 中君

あやしのう 二条院よそりのりおこひてこうや

まて 宮へもこうひうをや文をかくをとの匂ひ

おほへ文事とや 畢竟(ヒツキヤウ) 意(オボ)ほのひうし

これのまとゐるも おやみと意しの文

れこと私語うを 匂ひ文

なをこうれ 匂へうえあれの心

まうなう 中宮へ行てなひきん と給ふのえや

心日とり おをほうそそこと たにくゝりう〳〵ゆ給ふ

とうこうひて安心なうを〳〵

おうの給ふ かゝるはなうとなるとを とひおきてそ行

よるとなり

水海これ 意 心ゆるや

まうれを 匂へ乃や事〳〵をするなり

里のあるじの うち船 いとくるしき也
里人のいふなどと云ふを聞くにいとゞ返
てくるしくて 新勅選の題不云とへんじて
別すぢ覚束なくとへること難アル可見合
なくあるまじき 世つゞきへんじをもとなり
第一あるべきことても旨かへ返てていふと思ふ
あるべきあり
うちくるしき 同二首なり 白へや
天雲のそこ行くをきゝてゝくとものこゝろを
きゝてゝ 白雲のほのぬ雲井おもひおこせたるなるべし
遠と云ふん り舟ぢ返
雁のハ水乃泡とたふみん
何を叶約束をかゝんのそ(ラフミ)増あ
つれくと寄 字舟乃字 意へれ也 おくを思ひ
心をひくとみ乃字を云ふ雨を降うさされる
女文う 女二へや
すそを引 ついせうの詞
むすぶも 意道心あるを也
あると 字治をきるやうなり
ーーとなり
ゆのなる事 上篇(ラウ)を引て詞
同じなと思さる 沖門へむさとやなりてやなり

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

あの内記 大内記のたうと
きこつぎて 字続
こーなど 盆書
ものうく 下衆
この月九 三月
三治よ 宮うも
ちうふあ 俺ぬれを为と浮草の根ぜ級てさそみ水あ～
をいるんとそれのみ
まくの心はとう 乳母(メノト)一为してそうかるへのわこうを用
立勲(キ)成となり
八宝ふ 白玄の八宝花川山こかるともわりひたち

おハ昌ふうめや
ぬくれるんこふ弦おりをと 今日もかみよう社符なり
いのなる沙心ち 嬢姓(クワイセイ)のと云
石山とまう 月の陸(サハリ)てて石山詣(モウデ)する事不成さてそ五二
嬢姓事いうくとや
みーめ うき舟九沖
実うえ 中とうえとのおと
おうーまーと时九幸(サイワー)てあく
むよやうなるそ 芝へ沿ってあ
おろあるー 弁う媒(ナカタチ)せーも大町とうあーと思
ての事という

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ちるへをそん　母の娘なとをおよ
ひくさ〳〵ふることの　句れりのふる事
おほ（ハカリ）〳〵となり
さ乳すられ（子ヲヤシ）　娘事ことをやう
ゑをや　うえ母の
ようゝぬと城　うえ母へ　二条院そのるとの
まゝ思ひやまはとこむや
みたてさつゝ（フリヨ）　句へ　不恵あるなりも　字母れ
功上をも我をとゝ中ゑのまゝへもあるなりふゝく
いをとりふむなり
ゝらあるれ　母の討争ねるこを少乃狂るれも
母乃ス〳〵ゑ指の思くを字把ひる亦ゝ
ゝこや　字治書損也又ゝまゝ乃尼（ニ）へ（ル）字母の思
ゑおくへこそとゑむや
さつ川は　日本紀ゑ大山守皇子（オホヤマモリノミコ）隠（ウヂ）菟道川（ウヂカハ）（ニ）而没（シヌ）ゑ（ニ）云
ちもやゝらうの波ゝ掃ゝ
もこうをん
みこゝはゝ　ゑゆへ乃をとろへをゝくおとをゑゝれ
ゆゝゑむや　ゑせゝとみゝこゝ川みせゝ
うをするも成うゝれ

人をくなくめり　山詞うつりかいきらや
山表式の筆立方めし
ものうしみろう　女二をそ
らひとへを重ねて擬(モラフ)めり
かくこか　少将(ショウ)書(カ)きつゝひなり
ものうしをみつゝかくく
つゝもて相(サン)産(ウ)用(ヨ)うへ　糸度と定れ詞
うつなさ事ありとうへ　少将(ショウ)産(サン)用(ヨ)うや
を不可成とや
もやれまゝきそ　産(サン)ませりれ
なをめれこか　催馬楽　道のくの事(コト)
ありとおやうへ　むあひのり後　りくよま
まをかへ文と云母乃詞
風のちひうん　を海乃あまの塩やくをみ
おもぬうたなひき
面かうし口　面九日従(ヨリ)うへ
うのせうの家にて　或(アル)少将(ショウ)
相(サン)がく
うの表　出(イ)での擯(マロ)うの文と云　向方自法(ホウ)へ乃文と
云なをなり
さゑうん　さいとも速(スミ)しと来門大夫を出(イ)で守(カミ)面(オモテ)や

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

ものの人　うとねり　蔦のの人や
りこまちてをり　路（ソンキョ）おしてまゐりて　さすが上人
乃きりんを思てなり
上くもん　大政（ダイシヤウ）　政官　蔦令（センニヤウ）ケと書かや
大政（ダイシヤウ）なの被（ヒ）なや
おとやも　タ
治ひもさ　垂（ナウ）衣の紐（ヒモ）とそ　沸休息ものれらも
タへ礼儀あり
治井ねく　タへ蔦への礼義　蔦の詞
あるくハ　タ労礼ま
うとくし　一うとをひとゝ思へし才覚うしく治た
ろ階（スイジン）分となり
みちをうう　うるる乃ひ中
ね中ひうう　ね文もうねくもの
それそうれハ　中悉へて今始てみるまうす
くうう乃事とや
当ておかり出る　句礼答中へのうひ治ひ一時礼ケや
文め紀うう　うえ西孫
は文のぐ　一具や
礼く　蔦のをひや
をんことなく　ケ料（タイ）なとうともやもぬ人なれと大
叩さみと思ゑや

一品の宮乃　匂ひ給へる人々と一品宮よりあひ給へるを
も世にふたくひなき容貌もあるらんとなり
女のもの　蓋の家司
みちちさ　内記事
とこなつ　人々たゝ迷てをれてる
せうの作文　侍労うし大内記の蓋乃指弁を弱一弦
心合うを
波こゆる舟　蓋　兎と兎てあるとしし心と号のもたて来
乃松山波をあそうん
人々わらへも也　波こゆるの字をよみをてわらへ
世行ふかとのむせ
なまじひ　足纱ひてうそ舟の面たり色うと蓋乃文をも
よる波ゆるふひてなり
みくりとを　双　むらへのをてもおほしまぬ舟
のむなとうを
いと物哀　のるしふるまわる事といふり
道うてあまて　右近のうと文を内と道うそみ也
みつとをいもく　右をの悪心（アシキ）と双
伯爵と　右近と二人してなり
右近のあ袴のひもちうて
人々うを　右をの婿（ムコ）蜜通（ミツソウ）して二男をみてと也
ほとくみつまてを　上も下もうくれるあるを

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

けて我をすて　ひ事有まゝ（フウフリヘツ）離別をり
國ゝも　今乃至　うゑ男ひとりの國れ共のこらされた
れ物の事をりへ
あやまちする　人をあやまちもとそひとりのみ原ホ
ホ支をも國中をりくもせる
女のないくゑうー　み乃よう〳〵ぬ事とそ芝を
をひはつれーと右近の姉（ヲヂ）の事とみへ
あつ丈うり成てまくも　ほ母れ乳母（メノト）と右近の姉と親
れとなり
ほいれちまそそ　ほ令ものうする狂れ　かとくホ
材て又右ゑりうまさつそてもちの事ー式ゑ事ゝとみ

れ事ーやあらんとや
一所と　又一うゑふや
うへのおりひ　母うへなり
今ひとり　ほ後
いてやいとうゑーけ　ものおれ事
人れ物くれり　其のむのへ給うんとそ乳母（メノト）なと乃い
うくをりへ里
ぬなう　ふてうと云ホあり　不道乃仁や
そそれい　一類
うとねる　内舎人と書を給乃（ヲヂ）や
いみーくうれ　文れ折ー　ほ为上も如ゑと礼初や

たのときあそて　　史記　忠臣不仕二君　貞女
かくうせんするあるため
不更二夫
あのれとこ　　お返事はと催促
ぜうじ　雑事
はのぴときひやう　　弦妃当也
ゆくろうれ　　お返巣（フクロノ）とおそろしく思へる
さるや　　女人やうなたりをすかすかるたろうめさる
とぞ弁へや上や
めれとそ　　うと移すのこそ
やぎやう　　狡り

こけのみそまく　　志ふあらんのはそいろ松の
党乃こられて　　拉（うば）羅の妻と云事あり
ふーは　　はるま西川右事　　女人まて可弦丸
当津国の住女ありなるよる男二人あり一人はそれ
国の男一人そいろの国ひさーをひやーまてめいろ
うこへとも難生西川乃水多を勝（せうぶ）屓といさせこれ
二人なろいあてるさそ　　めいろ力をなけしや
河二委　　又大和物語
但俗ぬ我为なけてん津乃
なれ　　当ま二テ男同聘（メス）一女
蔵（ゾウ）めの二雄（オノ）之志ハ難（ネガ）事（ヒ）
徨（クワウ）也上（ニテホツテ）冗没水（ニテ）

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

扨対其北土等不勝忽類之至（ハテ）而心地欤（アイタイノ）
宇旨（オナジフ）縷（カクノコト）覚一万条十六 うゝみる事愚そいめく
人わらへ 字ゐの力
こめ紙 大やう
れうのふへ文 ねまそ（タッ）まあ必おろ〳〵く力紙る
あんなと思ひうとなり
かく 又右
とうたい 灯台
ゐうこづひ 文くの紙
う色したそおろう 白のむら色にはおおろ〳〵
紙のへしなうとなき（ナキ）ほれ事と思ひや

あの光 我光
ひなき 我老そむ事
やをゆくりかしう
りさらげや 九迷のずざ
ねよう 不用 今我なやそな
やうそさもたひ 糸への迷への夜自然用さんとも
めをとのりさ紙 さといるをりへを
たゆふ 大夫 出家対
ちらびる 置れるむ
宇宗（モル）一夫迷（テ）へ吹（ウ）放野（ノ）郷半了（ラウクワ）殯休 河
こまる垣をこさせる

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

あをうとのふ袖　川内なるふむりの死とある

うつりの袖ゆふむりそきとあるなのかふをや

あるをくる　河内なるふあること鬼とあること　まろそあ

たと思ふと一重あるく書たるを　鬼神をあることおさん

とをねもぬむや　きをあることを鬼れむおをこそても

と一重書たれあるく

ちるまきき　世上へちぬ袋みとや

そひさけ　遥(ヨウサケ)

大あやふ　姫の大り　ぬひ書

うりくるの言　白ゑ九うくらぬ山をふあくらねをとや

迎をうひきち　右近は白へこひを成うさとや

まちうま給後白へ参うさ迎こそ深みこれなり

いつまそて　給後へまてや

むおよ　期もなく

おびなとして　うを帯　帯うちうひともあり

うのむのをうふ　葛

たううりきど

なけきひ言　うえあも　ひをぬや

ひれあゆこ　そみも又むまの見うう吹つれひつ

たのあゆみちのきおうん　おゝに近(ヅ)ニ死地(ニ)入(ル)事　亦如(ク)ニ

号経文　屠所(トショノ)羊(ヒツジノ)歩(アユミ)事唐(カラ)ニ羊(ヒツジ)牧場食(スル)時みそみて

屠所へお具して行殺(テコロス)おふ　ちのひて死地うちの

ゆくえを安からず
うつをそふる
添ふの山をふさく 後撰中ねの衣
たゝみてもなれ 拾遺愛
ともまり 白水の用を見
ふくく 白みと墓と不敬(ルヒ)事(ナリ)
と云物を不云ともの用ひや
いむといふ事(ナリ) 解怠(ケタノ)書ニ曰 愛(メグ)病人死心(ヲ)
ゆうるを 女二の文(フミ)
のちよ又 多
うつゝ人をとふ 心羽や

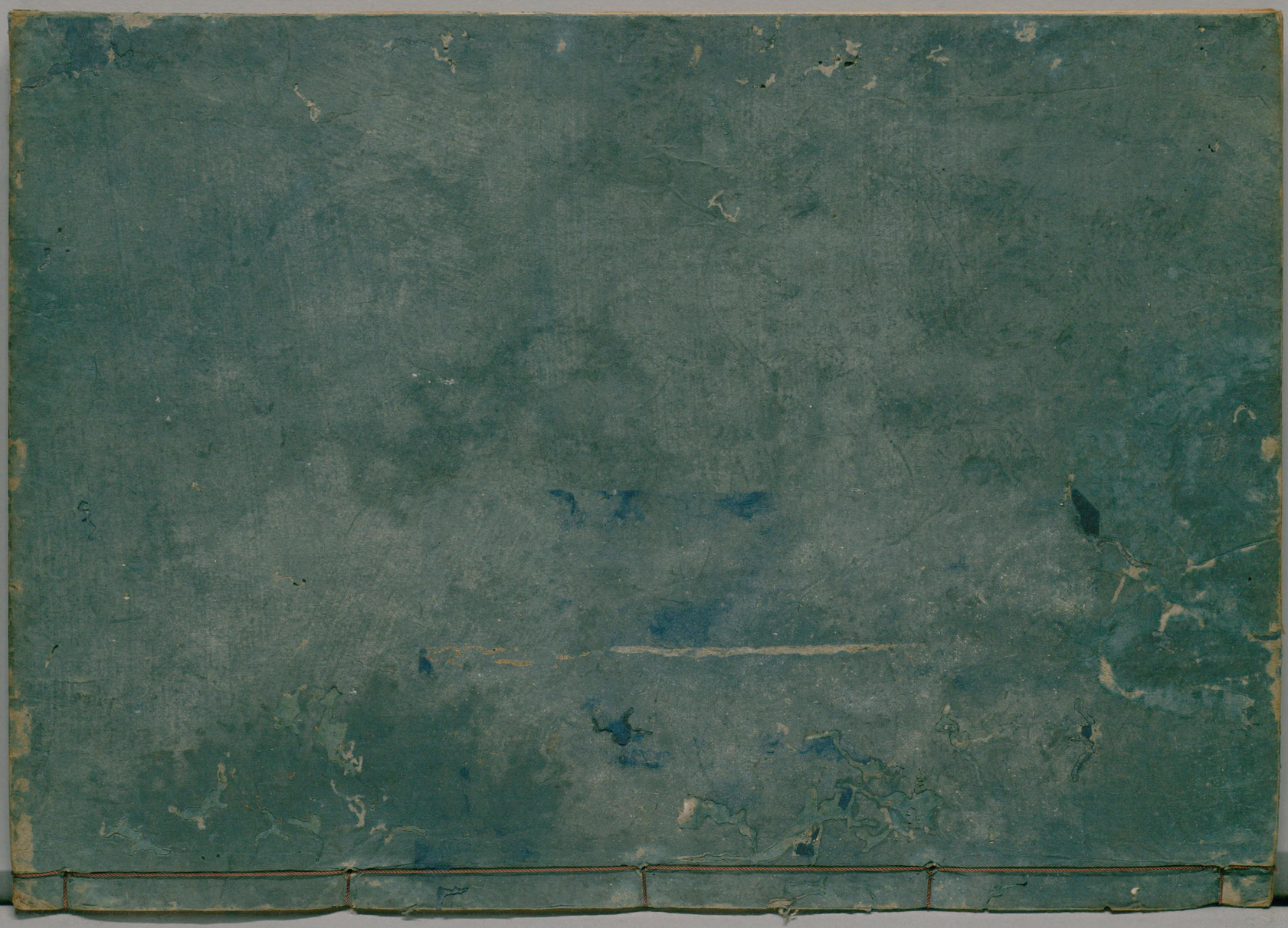
ともきゝる 補経(ヲギナフ)ニ云寒熱(ヲコリ)
書ける 白
うつるまゝとゝくる白 枝(エダ)付(ツケ)
数(カズ)珠(ジユ)を
むばらの 人(ヒト)なん
むくろを 火(ヒ)にむやけ
うや
又にくゝ 乳母(メノト)
わすれなく 母(ハヽ)の心
まんうとなり
世中 母のうへや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118
ガラス使用